

# 慣習化した言葉の獲得

立川多恵子

はじめに

人は挨拶を大切にする。その中には「おはよう」「ありがとう」といった慣習化された言葉があり、それらの指導は幼児教育の中では特に重要視されている。

挨拶は対人関係をスムーズにいくために大切であると同時にその民族の特有な文化であり、その形や言葉を子どもたちに伝えて行く必要がある。しかし子どもは慣習化された挨拶の形や言葉を伝えら

れただけでは不十分である。慣習的な言葉にも内面的な裏付けがあつて初めて価値が生まれる。そこで今回は「おはよう」「ありがとう」の言葉の内面の育っていくプロセスを考えてみたいと思う。なおこの際、子どもたちが遊びに参加する時用いる「入れて」「いいよ」の言葉についても再考したいと考える。

1、「おはよう」について

大分以前になるが、ある幼稚園を訪ねた際こんな情景を目にしたことがある。それは登園してきた一人の子どもが先生に「おはようございます」を言わずに保育室に入ろうとした時のことである。

先生は朝の挨拶をしない子どもに「おはようございますは……」と催促した。しかしその子はただもじもじしているだけであった。先生は「おはよう」が言えるまで、保育室に入れようとしなかった。園長の話ではその園では創設以来挨拶の指導を重要視しているということであった。

たしかに「おはよう」は朝の出会いの挨拶であり、先生方が大切にしている気持ちはわからないではないが、もう少し指導の内容を工夫できないものだろうかと考えた。そんな具体的場面に出会って、私は朝の挨拶についていろいろ考えてみる事が出来た。

大分前になるが、幼稚園の若い先生から次のような話を聞いた。「私のクラスになかなか遊び出せない

子どもがいます。登園すると、朝の支度をした後毎日机に向かって、家庭から持ってきた分厚い本を開いて見ているのです。私が他の遊びに誘おうとすると、『いいの、お勉強』というのです」と話す。

担任としてはその子に早く幼稚園生活の楽しさを伝えてやりたかったに違いない。その先生の話ではこの子は朝の挨拶がとてども丁寧で最敬礼して「おはようございます」とするという。しばらくして走り回って遊ぶようになり、先生もほっとしたが、気がついてみたら、あの丁寧な朝の挨拶は見られなくなっていた。そればかりか、登園すると先生のお尻をたたいてからかばんを置きに行くようになってしまった。

解放されることで、家庭でしつけられた丁寧な挨拶はしなくなったようだ。私は先生の話聞いて、園での緊張がほぐれ、形式的なものが崩れてしまったのだと考えた。しかし崩れることによって、その子なりの出会いの仕方が生まれるかもしれないと期

待した。その後機会があつてその園を訪れたが、その子は朝、先生に出会ふと極めて自然に「おはよう」と言つて保育室に入つて行つた。家庭で教えられた「おはよう」の挨拶は、その子なりの「おはよう」の挨拶に変わつていた。

その後私は次のような経験から朝の挨拶について、再び考える機会を与えられた。

近隣の幼稚園を訪ねた時のことである。園の玄関から「おはようございます」といつて入つたら、玄関の傍の部屋から三人の女の子がとび出してきた。

私はもう一度「おはようございます」と言つた。子どもは私を見た。その中の一人が「だれのお母さん」と聞いた。そしてもう一人の子が「チューリップ組?」と聞いた。私は「園長先生のお友達よ」と答えた。するとその中の一人が「園長先生呼んできて上げる」と階段を駆け上がった。その子が戻つてきたので、「ありがとう」と言つて、もう一度「おはようございます」と頭を下げた。子どもたちはこ

の時初めて「おはようございます」と答礼してくれた。

子どもたちは見慣れない訪問客に出会つて、「だれだろう?」「なんのために来たのだろう」等、訪



問者と自分たちとの関係を知ろうとした。「園長先生の友達」と分かると初めて親近感を持って「おはようございます」と挨拶をしてくれたのだろう。

「おはよう」の挨拶は就園前の子どもでも教えればやる。むしろ年齢が高くなると「この人はだれだろうか、挨拶した方がよいのだろうか」等いろいろなことを考えるようになり、単に模倣的な挨拶ができなくなる。

## 2、「ありがとう」について

園では「ありがとう」の教育も大切にされる。そのため先生が子どもに「ありがとうは」と催促する場面を見かける。

入園当初のことである。なかなか動き出せない子がいたので、私はその子を誘って兎小屋に行き一緒に餌をやった。彼はびっくりした表情で餌を食べる兎の口許をじっと見ていた。初めての経験だったにちがいない。

降園時私と再び出会ったその子は傍にいる先生から「遊んで貰って、ありがとうは」と言われ、とっさに大きく手を振り嬉しそうに「バイバイ」と言った。子どものこうした仕様に担任と私は思わず微笑んだ。さっきの兎に餌をやったことが楽しかったのだろう。その子が担任に「ありがとうは」と促されて発した言葉は「バイバイ」であり、「ありがとう」ではなかったが、大きく手を振って「バイバイ」をしたその子の表情には「さっきは楽しかったよ、先生」といった気持ちが充分包含されていると思う。

やがて彼も嬉しかった時、楽しかった時、感謝の気持ちの湧く時に「ありがとう」と言うようになるに違いない。そのためには先生が子どもとの生活の中で、気さくに「ありがとう」を言うことが大切である。そのことは子どもの人格を尊重することにもなる。

「ありがとう」について、学生Sはレポートの中

で次のように述べている。

\*

理恵と一緒に絵を描いた時、切り抜いてホチキスで留めて、小さな絵本を作り「あげる」と渡しました。私はその時の理恵の喜びようを今でも忘れることが出来ません。彼女はとても嬉しそうに目を輝かせて「ありがとう」といつてくれたのです。そんなに感謝してくれて、私の方が驚いてしまいました。

理恵はその時、心から「ありがとう」と思っ言ってくれたのです。私はすっかり感激してしまいました。た。

子どもは傍にいる大人に「ほら、ありがとうは」と催促されて、初めて「ありがとう」ということが多いようです。それは本当の「ありがとう」ではないと思うのですが、それでも子どもから「ありがとう」と言われれば嬉しくなります。この日の理恵の「ありがとう」は彼女の嬉しさがそのまま「ありがとう」の言葉に表現されていたようで、逆に私の方が「そんなに喜

んでくれてありがとう」と言いたくなってしまう程でした。……略

\*

子どもは実習生の配慮に、思わず「ありがとう」の言葉が出た。その「ありがとう」は子どもの真の喜びから生み出された言葉である。実習生の方も「そんなに喜んで貰ってありがとう」と言いたくなったと述べている。理恵の「ありがとう」の言葉に実習生は心をゆすぶられたのである。保育の世界は子どもを育てるばかりではない。大人が子どもに育てられたり変えられたりする。

### 3、「入れて」「いいよ」

研究会で一人の園長が、この頃の若い先生は「入れて」「いいよ」の指導もできないといって嘆いていたことがあった。幼稚園によっては、園庭でも、保育室でも「入れて」「いいよ」の声を聞く。

ある幼稚園で出会った場面である。数人の子ども

が、お家ごっこをして遊んでいるところに一人の子どもが「入れて」とやってきたが「だーめ」と言われて断られてしまった。

その子は「入れてくれないの」と先生に言いつけに来た。先生は「『いいよ』というお約束だったでしょう」と叱った。子どもたちは渋々その子を遊びに入れてやった。ところがその子が遊び出すとまもなく、前から遊んでいた子どもは次々にいなくなってしまうのでその遊びは終わった。

この時も私はしばらく子どもの「入れて」「いいよ」の言葉に興味を持った。

その頃知り合いの園長から、「うちの園に言葉の出ない子がいるので様子を見てやってください」という依頼を受けた。そこで早速その園に向いて子どもを観察していたが、時々その子の姿を見失った。何度目かにその子を見つけたのがチューリップの球根を掘った後の花壇の傍だった。そこでは数人の子どもが大きな泥山を作って遊んでいた。なかな

か面白そうなので、立ち止まって見ていたら、一人の男の子が「入れて」とやってきた。山を作っている子どもたちは一斉に「だーめ」といった。その子は残念そうな顔をしてその場を去った。



次にやってきた子どもも同じように「入れて」と声をかけた。子どもの一人が「シャベル持ってくれば入れてやるよ」と条件をつけた。その子は早速物置に言って赤いシャベルを探すとそれを持って山作りの仲間に入ってしまった。

最後にやってきた男の子は、友達のやっていることをしばらく見ていたが、「山の上に木を植えるといいよ」と提案して、持っていた二、三本の小枝をその山の上に差し込んだ。山を作っていた子どもたちは小枝を求めて一斉に四方に散った。その間にその子は山の形を好きなように作り変えてしまった。

一番先に「入れて」と言い、「だめ」と言われた子どもはもう一頑張りして貰いたかったが、「だめ」と言われたことで、どうしたら入れて貰えるか工夫するだろう。それも大切である。

二番目に条件はついたが、仲間に入れて貰えた子どもの場合は山作りの仲間が、あの子は入れてもいいといった気持ちがあり、条件つきにしたのかも

れない。「入れて」「いいよ」の慣習的な言葉の指導では経験することのできない人間関係の学習の機会である。最後の子どもへの入り方はみごとである。「入れて」の言葉なしに入り、遊びの主導権をとってしまった。以前から仲間だったのかもしれない。

「入れて」について、学生Fはレポートで次のように述べている。

\*

少し遅れて登園したCが黙ってその活動に入りブロックでピストルを作り始めると、Aが「入れてって言わないとだめだよ」といってブロックを取り上げた。Cが聞こえないふりをして相変わらずブロックで遊んでいると、もう一度Aが「入れてといわなければだめだよ」と言ってCをつついた。その時それまで何も言わなかったBが「入れてといいな」と言い出した。

\*

Fは自分が「入れてやろうね」とか「一緒に遊ぼ

うね」といったら「入れて」「いいよ」の関係を義務づけることになる。そこでしばらく見守っていることにしたと述べている。子どもの世界に子どもなりのルールがあり、それを守れるようになることも成長であるが、それらのルールは子ども同士がぶつかり合いながら徐々に身につけていくことが大切だと考えている。そしてもし「入れてくれない」と言いつけにくる子どもがいたら、私は「もう一度頼んでみたら」と声をかけ、出来るだけ子どもに任せ、見守り、子ども自身が仲間に入れて貰うための工夫をするように援助したいと思ったと結んでいる。

「入れて」「いいよ」の言葉を義務づけるのは賛成できないが、「入れて」が子どもの世界の仲間入りのルールであるとしたら、それを子ども同士の関わりの中で獲得して欲しいと願うFの考え方は大切にしたい。

## まとめ

日本社会の慣習的な言葉は、「おはよう」「ありがとう」「入れて」だけではないが、保育界で重要視されている三つの言葉を取り上げ、言葉と内面の育ちの関係について考えてみた。「おはよう」や「ありがとう」にしても、「入れて」にしても、それらは人間関係を円滑にする言葉であり、とかく大人は言葉を教えることに熱心になる。

それも大切ではあるが、言葉や形にこだわると、それらを押しつけることになり、内面が育ちにくくなる。こうした慣習的な言葉の内面を育てるには、余り形式にこだわらないことである。園生活の中で先生や友達と出会いながら、自我を育てて行く中で心情的なものが育って、身近な大人や友達の使っている慣習的な言葉と結びつく。言葉の内側をどう育てていくかは保育の重要な問題である。

(十文字学園女子短期大学)